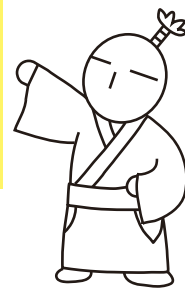


虚空蔵山城

第4次発掘調査 現地説明会

平成 28 年 9 月 10 日・松本市教育委員会



1 虚空蔵山城跡とは？

(1) 信仰の山『虚空蔵山（こくぞうさん）』

「会田富士」の名で親しまれている虚空蔵山は、標高 1139m の美しい形をした山です。山頂や山腹には巨岩や湧水がいくつもあり、その名が示す通り、古来より信仰の対象となってきました。山腹の岩屋神社や、山麓の会田周辺に集中する古い寺院がそれを物語っています。

(2) 虚空蔵山城の時代

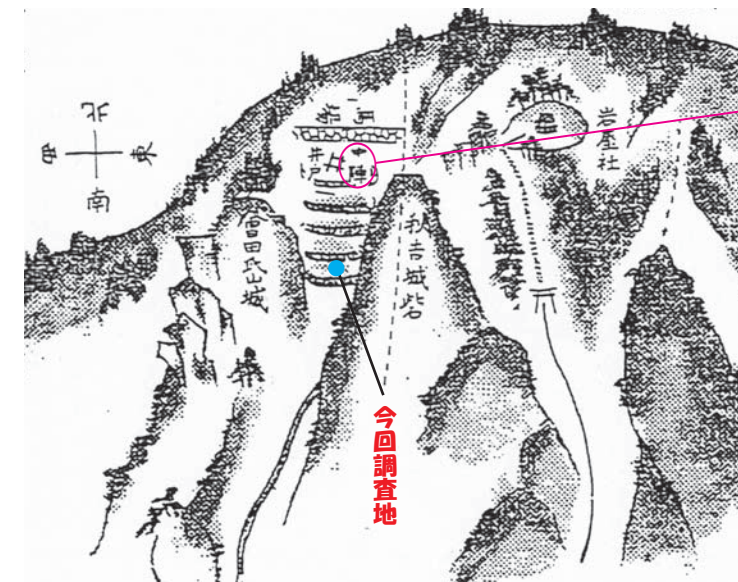
虚空蔵山は、会田盆地の北、筑北盆地との境目に位置しています。その麓、交通の要衝である会田の地は、鎌倉時代までには東信から入った会田海野氏の支配がおよび、殿村遺跡周辺に居館を構えたと伝えられます。会田氏は一方、この地にあった伊勢神宮の所領、会田御厨（みくりや）の経営にも当たっていました。

虚空蔵山城跡は会田氏の詰めの城とされ、山頂や南側の山腹に数多くの平場が築かれていますが、築城がいつはじまったのかはわかっていません。ちなみに古文書に登場する虚空蔵山の記録は、天文 22 年（1553）に武田晴信（信玄）が会田盆地南部の刈屋原城を落した時、「会田虚空蔵山まで放火」したのがはじめてです（「高白斎記」）。これにより会田氏は武田方につきます。武田氏滅亡により上杉氏の勢力下に入った後、天正 10 年（1582）には、深志（松本）を回復した小笠原貞慶の侵攻によって、ついに会田氏は滅亡します。その最後の戦いは、会田川をはさんだ対岸にある矢久（やきゅう）城（一期城）と言われています。

(3) 虚空蔵山城の特徴

山全体が城と言っているほど壮大な構えであり、立地的に筑摩郡の南北を分ける巨大な衝立のような役割を果たしています。狭い稜線を堀切で分断した山頂の「峯ノ城」や、山腹の尾根上に築かれた「秋吉砦」や「中ノ陣城」などのいくつかの城が山の各所に配置された城塞群とも呼ぶべき構えです。

こうした尾根や稜線の上に構えた城に対して、秋吉砦と中ノ陣城に挟まれた谷間には、石垣をともなう大規模な 6 段のひな壇状の平場群があり、通常の山城とはおもむきの異なる空間となっています。しかも、秋吉砦からのびる 3 本の竖堀と、堀に沿って築かれた土塁によって隔絶されており、二つの城によって堅固に守られた、最も重要な空間だったのではないかと考えられます。



明治 9 年に描かれた虚空蔵山城
（『長野県町村誌』より）

水場付近（ひな壇状の平場の最上段）に『中陣』と書かれていることに注意。

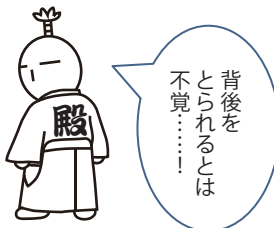


虚空蔵山と会田宿

2 発掘調査の目的

この発掘調査は、虚空蔵山麓の歴史の中で、殿村遺跡と虚空蔵山城がどのような関係にあったかを調べるため、平成 24 年度から実施しているもので、今年度は下記を重点的な目標としました。

- (1) 秋吉砦と中ノ陣城の間に挟まれたひな壇の平場群の性格は何か？
- (2) 竖堀・土塁とひな壇状の平場の前後関係の解明
- (3) 石垣の構造がどのようなものだったか（特に背面構造）



3 調査の成果

(1) 前回までの調査

平成 24・25 年度の第 2・3 次調査では、ひな壇状の平場群の最上段における、遺構や遺物の確認や、水場とされる池や石垣の構造の確認を行いました。その結果、平場は大きく 2 時期にわたって造成されていることや、現在見えている石垣の背後に古い段階の石垣（旧石垣）が潜んでいることが確認されました。また、礎石建物跡や、瀬戸産陶器の皿や茶壺、中国産の青磁碗や白磁皿などの高級な品々も見つかっています。

(2) 今回の調査

今回の調査は、平場群の最下段で、竖堀・土塁と平場の前後関係の確認や、平場の構造の確認などを行いました。その結果、前回までの調査と同様に、平場が大きく 2 段階に変遷し、竖堀・土塁が新しい段階でつくられていることが確認されました。また、中国産の染付の皿や、瀬戸産の天目茶碗や皿なども見つかっています。

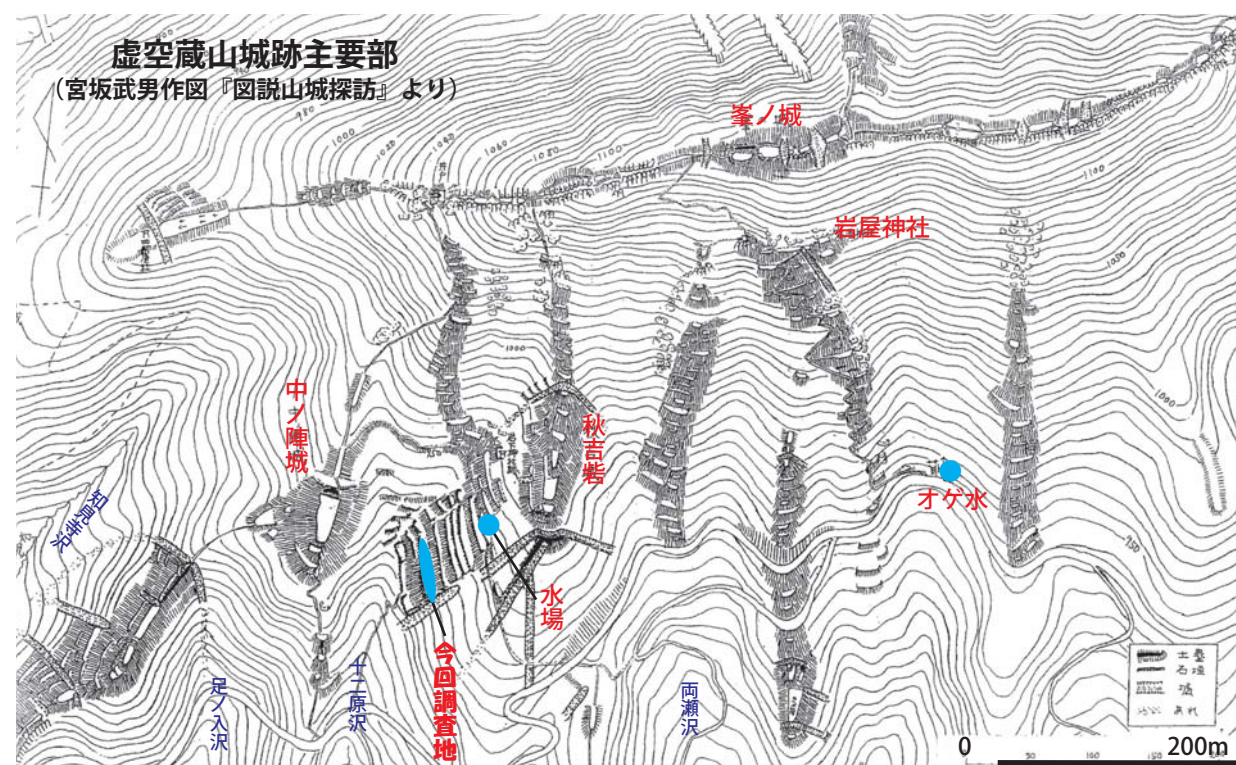
4 まとめ

今回の調査では、最上段の平場と同様に、平場群の最下段においても、2 時期にわたる造成が行われていることがわかりました。第 1 面の段階（16 世紀）には、平場の東側にある竖堀や土塁といった城郭を特徴づける遺構がつけられています。また、この段階でつくられた石垣は、裏側の補強（裏込め）が念入りに行われており、これは殿村遺跡の 15 世紀の石垣にはみられない特徴です。

第 2 面の段階（15 世紀後半～16 世紀初め）では、とても丁寧な造成がなされており、山城特有の遺構は認できませんでした。また、前回までの調査も含め、礎石建物や茶道具、高級な輸入陶磁器などが出土しています。このことから、第 1 面と第 2 面は、異なる目的のもとで造られ、場の性格が大きく異なっていたのではないかと考えられます。今回の調査では、出土した遺物の量が少ないため断定することはできませんが、堀や土塁を伴わない第 2 面は、谷間の平場群が城郭化する以前の姿を示しているのかもしれない。

ひな壇状の平場群は、大規模な土砂の移動がなされ、壮大な石垣の築造をしていることなどから、有力な勢力の主導により、大量の労働力が投入された土木事業の結果であるということは間違いありません。

また、松本平を中心とする信濃の城郭石垣の発掘はほとんど行われていないため、今回の調査は松本平の中世・戦国期の石垣の変遷を考えるうえで重要な調査となりました。まだ解明すべきことが多々ありますが、今後も殿村遺跡と虚空蔵山城跡の調査を通して会田地区の歴史を明らかにしていきます。地域の皆様には、殿村遺跡調査事業へのご理解とご協力をお願いします。



(1)

(2)

19
ト
レン
チ

平場の中央部に設定した19トレンチでは、1面段階の石垣の裏込めの石が見つかりました。16世紀後半のものと思われる鮮やかな青い絵付けが施された中国産の陶器(染付)が出土しています。



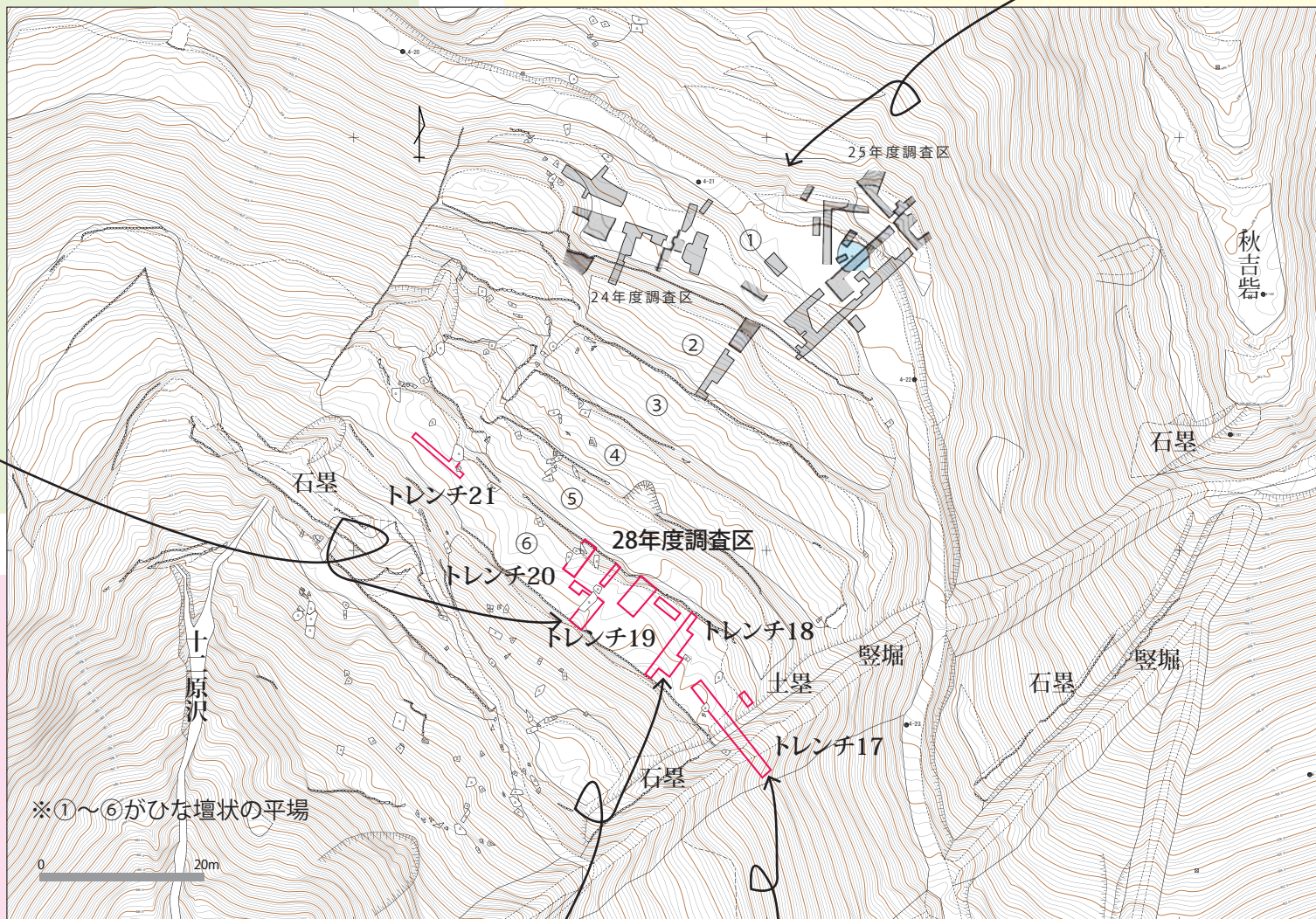
◀石垣の裏込め石



▶出土した染付



▲平場前面の石垣



※①～⑥がひな壇状の平場

0 20m



▲石垣前の溝



▲天目茶碗



▶トレンチ全景

18
ト
レン
チ



▲石列をめぐる礎石建物(2面段階)



▲最上段平場西端の石垣(1面段階)

これまでの調査



◀顎止め石を伴う石垣



▲H25年度発掘旧石積み(2面段階)

虚空蔵山城跡は、これまでに2回調査を実施しています。礎石建物や古い段階の石積みが見つかったほか、最上段の平場前面の石積みには、基底部分の石を前にせり出させる「顎止め石」が発見されました。

17
ト
レン
チ



◀土塁の断面



▲豎堀と土塁



▲石を敷いた溝状遺構

南北の長いトレンチを掘ると、豎堀と土塁は1面の段階につくられたことがわかりました。それより古い2面では、石を敷いた溝状の遺構が見つっています。この溝は上り勾配になっており、1面の土塁の下へと続いていました。

平場を南北に縦断するこのトレンチでは、背面の石垣の前に排水溝があったことがわかりました。他にも集石や柱穴が見つかっています。石垣の裏込めの土からは天目茶碗が出土しました。